

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 109 号
2019年 6月

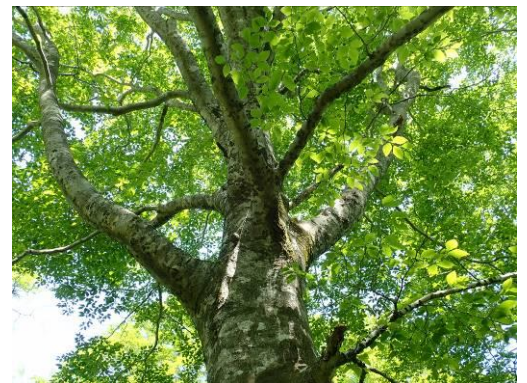


第 164 回自然観察会:土湯峠・新緑のブナ林と湿原植物観察会

6月2日(日)に第164回自然観察会を開催しました。参加者は22名でした。今回は、当初予定していた吾妻小屋一鳥子平湿地間の遊歩道が火山活動のため立ち入り禁止となったため、野地温泉から土湯峠・鬼面山展望台を経由してブナッ子路を下る周回コースに変更しました。この山域は2002年に鬼面山山頂までの観察会を実施して以来となりました。

通常であれば目的地に着いたらガイドスの後、いざ観察となるのですが、今回はガイドス前に参加者がエゾハルゼミを見つけ、身支度も早々に観察が始まってしまいました。改めて参加者の観察熱の高さに驚ろかされました。

季節はブナ新緑の色が増す時期で、初夏のブナ林の爽やかな空気が漂う中、ブナ林を構成する木々の花を観察しました。なかでもウワミズザクラが満開でしたが、標高差約1000mの福島の田園地帯と比較すると開花期は1か月も違っていました。ブナの高木の下では発芽したばかりのブナの実生も観察できました。ブナ林を抜け、チシマザサとヤナギやツツジ類等の灌木主体の土湯峠を通り、鬼面山に向かいました。鬼面山は約45万年前の噴火によりできた溶岩ドームです。そこでの植生は乾いた環境でも生育できる樹木類が主体になりますが、その日陰ではツマトリソウがしっかりと息づいていました。展望台では磐梯山・吾妻連峰・飯豊山の眺望を楽しみました。帰路のブナッ子路のブナ林ではヤマトユキザサの花を観察しました。



緑深まるブナ



エゾハルゼミ

茶臼森山・裏花見山のスプリングエフェメラル観察会に参加して 白沢和子



第 163 回観察会(古峯神社にて)

花見山を眺めながら歩く裏花見山の観察会。私は東屋を目印に、小さな花見山を見つけ、それを囲む渡利の里の桜色の見事な広がりには驚きました。遠くに吾妻小富士、数日前の雪で白く輝く吾妻連峰に似合う空の色を楽しみながら、目指した場所は雑木林の明るい斜面いっぱいのカタクリ。誰も居ない、私たちとカタクリの静かでうれしい居心地の一服でした。

久しぶりの参加は、順子さんの電話でした。彼女は古い会員で、今は山を歩けません。観察会を、健康だった自分を、急に懐かしく思い出されたようです。

さて、観察会のニュースの一つは増田君です。目にする花や樹の名を即、言えるのです。若さだけではないすごい記憶脳をお持ちのようです。守さんの詳しい観察を促す熱心な会員の存在は、会の喜びです。増田君はきっと大切な存在になるでしょう。期待しています。

私が内緒にしたいことなのだけれど、花の名を教えていただいても三歩歩くと「アレナンダク？」となるのです。もう一度聞くこともあります、多くは忘れたままです。しかし、観察会は好きなのです。どんな空も雲もいいし、幹も枝も花も葉もいい。季節いっぱいのゆっくりした一日がすてきなんです。深く山の香りをかぐと私は消え、さらりと風が過ぎると現れ歩いている。いつも初めての小さな山道。楽しんでます。

次のニュースは土井さんです。花粉症でマスクをしていた人に頬と首筋の手当てをする。鼻血が流れた人には腫を打った。ほうれい線に効くポーズ「雨かな」を教わり、私たちは手のひらを上に向けて、アメカナ、アメカナと唱えて大いに盛り上がりました。

そして一週間後、信夫山の北側を見て暮らす私は、桜色ともピッタリの芽吹きの数知れない薄緑色に一年ぶりの歓喜です。こんな色のオーガンジーのワンピースを着たら、ふわりと地を離れ、「おうい雲よ・・・のんきさうじゃないか・・・」なんて歌いだしそうです。



裏花見山から安達太良連峰を望む



斜面はカタクリに覆われ



ヤマサクラを背に昼食

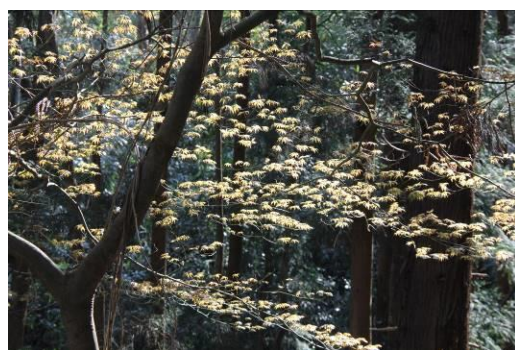
春の目覚めは食と性の起点で、植物、動物を問わない。冬芽が芽鱗を破って伸びていく姿はまさに目(芽)からウロコ(芽鱗)。芽鱗は内側に押しやられ、芽は花や葉へと育っていく。枝の皮を突き破って現れるものの姿を見ると、生まれんとする已むに已まれぬ力を感じずにはいられない。短い活動期の他は根に栄養を蓄えて翌春を待つカタクリも1年目はかぼそい葉をたった1本のろしのようにぶら上げしている。いかにも頼りなげな立ち上がり方だが、風の力がかわしたり、いろいろな角度から光を拾おうと揺らいでいるようにも感じられて見入ってしまう。長い眠りでどんな夢を見ているのだろう。落葉豊かな地に這いつくばるとカタクリの花は花茎の上部でカーブして下を向き花弁を思い切り反らしているの、なぜこんなに反らしているのですかと代表に尋ねるととても慎重な言い回しをされた。「想像ですけど生殖器を壊さぬよう紫外線を避けているのではないのでしょうか。」そうであれば光の質を選ぶために種々の光に対応するセンサーを自身の中に備えていることになる。生命の反射的な営みの絶え間ない繰り返して身に着けたものだろうか。

ヒトの身体も無意識下に神経系とホルモン系の調整が行われ、これを恒常性と呼ぶ。ヒトは植物の根を体内に納めて移動する動物でこの根が主に消化器を中心とした内臓に相当しており、水分や養分を消化・吸収して自らの栄養代謝と種の繁殖を行う。内臓の成長は感情を育み、それらが一定以上に発達すると子供は集団の中に放たれる。例えばおしっこを我慢するのは膀胱の機能がしっかりしてくる6歳頃で、それが小学校入学期となっている。集団の中で自己を抑制するのはヒト社会での最低限のマナーであるからだろう。

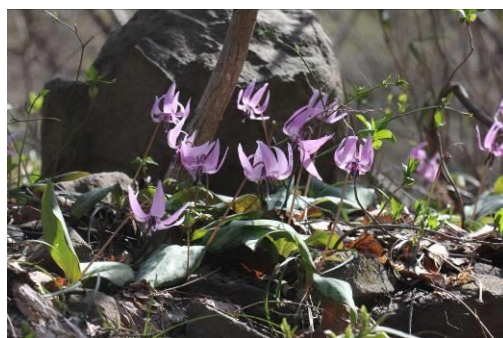
初夏から梅雨にかけても引き続き消化器は働くが、外気温の上昇によって体温調節がせわしくなると呼吸器が活発に働く季節に移行していく。この時、スムーズに発汗ができない。人は身体の掃除ができないし、汗を冷やすと内攻して身体を壊してしまうことがある。特に、人工的な環境に長くいる人はそれに適応し、体温調節の幅が狭くなる。好んで居続けたり、そこに押し込まれたりすることが熱中症の背景にある。だから一年を通して外気と同調する空間(部屋)を家の中に設けておくことが求められる。

この初夏への移行期には、普段隠れているところを日光浴させたい。ヒトが四つん這いになった時、陽が当たる部分を陽(よう)、当たらない部分を陰(いん)と読んでいる。陰に相当する掌、舌、臍などを陽にかざすと、自然の一部である身体は季節をインプットされ、無意識下にその季節への適応を開始するらしい。汗をかいたら、こまめに拭くと良く、もしも、うっかり汗を冷やして引っ込めてしまったら、早めにそこに蒸したタオルを当てて発汗させるか、誘い水を飲みながら入浴するなど発汗を促すようにしたい。腋の下の汗を冷やして肋骨が痛み、呼吸がしにくくなったり、首の汗を冷やして頭痛や視力異常、血圧の上昇、悪心、下痢なども起こる。冷房では大腿後面外側にツツパリが出て坐骨神経痛を訴えたり、皮膚が閉じて内熱が逃げ場を失いだるくなったりする。汗は放射性物質も良く排出してくれるし、内臓の汚れの調整も含めて、体質の改善、維持に役立つので私もこの機を逃さず、良い発汗を心掛けている。

光合成に支障をきたすほど葉の温度が上がってくると、気孔を開いて蒸散し適温を保っている。植物と同様、本来、人の身体にはそうした自律神経系の機能が備わっており、この神経系は別名、植物神経または生命神経とも呼ばれる。植物からヒトへと生命の在り方の中心そのものは一つながりに受け継がれてきた。だからそこに、ともに季節を過ごすものへの身体からの共感が自然と生まれてくるのだろう。多様な尺度で時を刻みながらも生命が響き合うことはなんと素晴らしいことであろうか。



陽ざしを浴びるハウチワカエデの若葉



陽ざしの中、花冠を反転させるカタクリ



ガマズミの若葉と花蕾

五十二年ぶりに中央アルプス千畳敷カールへ行った。バスとロープウェイを乗り継いで40分、降りた所は、もう千畳敷カールのお花畑、そこは高山植物の宝庫でチングルマ・イワカガミ・コマクサ・ウメバチソウ、その他数多くの可憐な花々が一斉に咲き乱れていた。

以前ここに来たのは高校時代、ロープウェイ等はまだまだなく、夏山合宿の重い荷物を背負い、二日かけて木曾駒ヶ岳の頂上近く(宮田小屋)のテント場に到着した。翌日はこれからの縦走に備えて、休息のため停滞日とした。その日は朝ゆっくりと起きだし、サブザックに水と昼食を入れて千畳敷カールまで走り降り、雪渓でビニールの風呂敷をソリにしで雪滑りをした。当時はそこに数々の高山植物が、健気に咲いていたことなどには気が付きもせず、また考えもしなかった。周りの登山者たちも楽しそうだと、高校生たちの振舞いを、目を細めて眺めていた。今思うとなんと罪

深きことをしたことやら、どれ程の高山植物を踏みつけたことだろうと、思ったりもするが、宝剣岳や木曾駒を仰ぎ見ながらの、雪渓での雪遊びは本当に楽しかったこととして思い出に残っている。

若者たちは、肉体の強靱さと、知識の未熟さという若さの特権を、大いに活かし青春を謳歌する。時にはバンカラを気取ったり、外見だけの詩人になったりして、変幻自在に思い出作りに励むロマンチストになる。そんな時に山に出会うと、それはもう滑稽だ、どう見てもこれは一見して、ロマンチストではないと分かる先輩の、甘い言葉にだまされて、山岳部に入部してしまう。そしてそこは案の定、ロマンチックとはかけ離れた世界だった。圧力釜を背負い、底の真っ黒な大鍋をザックの後ろに縛り付け、食料を入れた一斗缶やテントを担いで、高山植物などには目もくれず、先輩たちに追い立てられながら、縦走路を駆ける様にして歩かされた。勿論先輩たちの中には詩人や哲学者は一人も居らず、飯炊きに失敗した下級生の食事当番に「俺は粗食には耐えられるが、少食には耐えられない、何とかしろ」等とぼざく様な輩たちばかりだった。仕方ない俺もきつと同類項なのだとか妙に納得して、まあいいかとホットしたりする、そんな混沌とした気分の青春時代だった。三十を過ぎた大人たちは、そんな若者たちを分別顔で、嘲笑したり無視したりするのだろうが、青春はそんなことことにはお構いなく、一途に憧れたロマンチストに向かって突っ走る。だ

がやがて時が経ち若者たちは、今迄自分たちが過ごした環境に疑問を持ちはじめ、馬鹿々々しく思えてきて、山を去る者、また遠ざかったものの、思い出したように時々黙ってひとり、山歩きをする者たちとに分かれて、それぞれ散っていく。そのどちらもが若かりし日に、ロマンチストに妄想をいただいたことなどには、すっかり忘れたふりをして・・・

やがて老いを自覚した男は、その時から老の坂道を滑り転がり落ちはじめる。それを止めることはできない。運がよければ、その速度を少しは抑えることができるかもしれないが、止めることはできない。ましてや回れ右をして、下り坂を上り返すことなど不可能なことだ。そこで仕方なく老人は時々若き日の思い出に浸り昔を懐かしむ。

だから今思う。「高山の原生林を守る会」で勉強して、高山植物の貴重さや木々の芽吹き的美しさ、自然の大切さを知ることのできた私だが、美しく可憐な高山植物を愛でる心を持たなかった、昔の無知だった自分を責めはしない。勿論現代では到底許されざることだと重々承知の上で、それらに気づきさえもせずに、雪渓に遊んだ若き日の自分に憧れてしまう。



千畳敷カールのお花畑(アオノツガザクラ&イワカガミ)



木曾駒ヶ岳とクルマユリ



ミヤマトリカブト

私が住んでいる新地町は、2011年3月の東日本大震災のおり壊滅的な被害を受けました。沿岸部は大津波により跡形も無く流されてしまいました。大勢の方が亡くなり、住む家も無くなり、大破したすべてのものが残骸となって目の前に広がっていました。あの時の絶望感・無力感は8年経った今でも忘れることはできません。

さて、この3月に県事業であった埴浜防災緑地の工事が終わりました。昨年、当会の第158回自然観察会では工事中ではありましたが、福島大学の黒沢先生や工事を担当した福島県相双建設事務所復旧復興部の方の説明を受ける事ができました。植生保護の観点を持って復旧・復興工事をするのはまだまだ例が少なく、この埴浜防災緑地に2haの植生保護地があるのは画期的なことだそうです。

50年前、私の記憶の中では葎と蒲(ヨシとガマ)がずっと広がる光景があります。田んぼでは収穫が終わると暗渠をしていました。浦であったこの土地の改良をしていたようです。海でも遊びましたが、海の水に入るまでに足の裏が熱くて「あちち」と言って入ったのを覚えています。そのくらい砂浜が広大でした。その頃は堤防もなく、松林や竹藪が海岸通りの海側にずっと続いていた気がします。今ではほとんど見られない自然海岸が続いていたのだと思います。その後、浜辺の風景はどんどん変わりました。コンクリートで固められた大きな漁港、消波ブロック、高い防波堤。砂浜は無くなっていきました。浦は埋め立てられて、浦であったことさえ忘れて人々が住むようになりました。

新地発電所ができるときに、発掘調査がありました。私の家は大きな塩溜め跡に立っていたそうです。その昔は塩作りもしている土地柄でした。そういえば、父の話では祖父が自分で塩作りをしていて、山奥の実家に運んだことがあるそうです。自給自足が当たり前だった頃は、塩作りも自前だったのでしょ。

本年9月8日(日)に開催される第164回自然観察会では、午前中、新地町農村生活改善センターで新地町公開講座として黒沢先生の講演を聞くことになりました。午後からは埴浜防災緑地の湿地を観察します。講演会では津波跡地の植物の変化や沿岸部開発の歴史、復興事業後の植物の変化や、その成果と課題等、貴重なお話が聞けると思います。高山の会の皆様もぜひご参加ください。

先日私は、埴浜防災緑地に行ってみました。昨年駐車した場所は立派な駐車場になっています。立派な立て看板もあり、昨年観察した自然観察池・塩性湿地予定地は「湿地」と表記されています。(写真)6月10日現在、コウキヤガラの群生地となっています。ウミドリはありませんでした。葎や蒲はもちろんありますが、まだ主たる植物とはなっていません。

この湿地が植生保護地であることや、この地が元々は浦であった事を知るの大切なことです。私達は自然の恵みと共に自然の脅威と隣合わせに生きています。そのことを忘れてはなりません。9月8日の観察会と講演会が楽しみ(2019/06/11 記)。



埴浜防災緑地公園の案内板が設置されていました



再生湿地は2か所です



湿地はコウキヤガラの群生地となっていました

東北ブナ紀行（69）

奥田 博

2019年の冬は極端に雪が少なく、山形の月山・朝日連峰周辺の山に出掛ける機会が増えた。ところが3月下旬から山には雪が積り出して4月はタツプリと雪山を楽しむことができた。今回の二つの峰は、3月の雪の少ない時期に登ったが、寒河江川を挟んで対峙する藪山で積雪の季節しか登れない。両山共、中間部に見事なブナ林が広がっていた。

103) ヨウザ峰手前 825mピーク

ヨウザ峰という山名は、不思議な名前だ。カタカナ文字の山は全国に分布しているが、ヨウザ峰はここだけ。まずは北側の林道を進み、地図通り尾根に上られる最短の谷に入ると、簡単に尾根に出られた。あとは尾根を進むのだが、実際には尾根通しに歩くには急坂だったり雪が着いていないので、回り込んだりして、忠実に尾根に戻ることがポイント。急な人工林の森を越えると、やっとブナ帯に入った。急斜面をトラバースすると、正面に見事でユニークなブナが現れる。この先はブナの森を歩くが、細かなアップダウンが続くので、帰りが思いやられる。途中にスギやヒノキ林が現れ興をそがれる。その林を抜け小ピーク下ると再びブナ林。ブナの大木のある展望ピークに到着したところで昼食。行動もここまでとした。朝日連峰や月山・葉山などの展望と見事なブナを眺めながら至福の頂だった。（ここからヨウザ峰まではアップダウンの尾根を1時間位？）

コースタイム：登山口（30分）尾根（2時間30分）山頂（2時間）登山口



104) 大明寺山 865m

大明寺山はヨウザ峰の寒河江川を挟んで東向い側。今年は雪が少ないといわれるが、道路脇は2mほど積もっている。別荘と思われる小屋へ這い上がって、さらに急な斜面を登ればお決まりのスギやヒノキの植林地が広がる。切り頃を迎えた林だが、早く伐採してブナなどの萌芽更新（営林署のいう天然更新）を促進した方が、昔の森に変わるのだが。スギ林を抜けると尾根にはブナが現れる。急な斜面が落ちていても、時折気の抜けない斜面が現れて苦労する。ギャップを越えると、太くて大きなブナの点在する広い尾根に出た。帰りが楽しいな斜面だ。やがて山頂の一角に飛び出した。山頂は北峰と南峰に分かれているようだが、ここまでとする。クマ棚の写真を撮って、下りにかかった。下りは快樂の人と苦行の人に分かれてしまった。

コースタイム：登山口（3時間）山頂（2時間）登山口



（左）ヨウザ峰手前のブナのピーク



（右）山頂の熊棚、熊の食事中を見たいものだ

ツマトリソウ (*Trientalis europaea* ヤブコウジ科ツマトリソウ属)

吾妻・安達太良連峰のブナ林から亜高山針葉樹林の湿った林縁や草地に植生する多年草。合弁花であるが花冠が深く7裂するため花弁の様に見える。一見、キヌガサソウを小さくしたような印象だが、キヌガサソウの白い花弁の様に見えるのはガクで全く異なる植物である。垂直分布は標高 1250~1700m で植生域は広い。

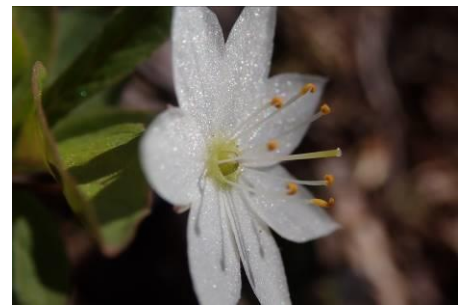
葉は互生で下部の葉は小さく最上部の葉は大きく輪生状に着く。形は先の尖った楕円形で主脈から側脈が平行に走る。葉縁は全縁で鋸歯が無く滑らか。

花芽は腋生、先端の葉腋から花柄を伸ばし、白色の花を上向きにつける。花冠は7弁に分かれて咲き、雄しべは7個、雌しべは1個ある。花は通常は1個であるがまれに2輪着生させる個体もある。名前の由来は裂片の先端が紅色に染まる個体があり、その様を鎧の「褓取威(つまとりおどし)」になぞらえたことに由来するとされる。

1988年夏に高山の原生林を守る会として最初の本格的な高山の植生調査を行った。第1回目に紹介したツルニンジンと同様に麦平から頂上に至る登山道沿いで白い小さな花が咲いているのを見つけた。それがツマトリソウであった。名前は保積氏から教えてもらったのだが、白い花弁に光が散乱してダイヤのように七色に煌いているのが強く印象に残った。以来、ツマトリソウは私のお気に入りの花となった。初見が高山山頂部付近であったこともあって高山植物のイメージが強かったのだが、ブナ林登山道沿いのチシマザサに覆われた一角でも群落を形成しており、植生域が広いことに最近気づいた。7つの裂片または花弁を持つ花は稀な上、ツマトリソウは雄しべも7本であり、何か幸運をもたらす花ではないかと勝手に思い込んでいる。



草姿



花弁の輝きと雌しべ

キバナウツギ (*Weigela maximowiczii* スイカズラ科タニウツギ属)

吾妻・安達太良連峰のブナ林のやや湿った林内に植生する落葉低木。ツクバネウツギと異なりガクは開かず、上部の短い3裂片と下部の長い2裂片に分かれる。

葉は対生。葉柄は無い。葉形は先の尖った長楕円形で葉縁は細かい鋸歯があり、葉身はやや波打つ。葉の両面に毛がある。

花は頂腋生。枝梢先端とそれに続く葉腋部から漏斗状の合弁花を2輪着生する。花冠は5裂し、下部3裂片の中央部は広く、内側に橙色の網目状紋が入る。雄しべは5個で雌しべは1個である。雄しべは5個の葯が平板状に合着する。柱頭は半透明で円盤状。雄しべは雌しべの上部に着生し、開花間もない花の葯は柱頭から離れているが、老化すると葯は花柱に接する。花冠の色は蕾から開花初期は緑白色であるが、成熟すると黄色みが強くなる。裂片が赤紫色に縁どられる個体が存在する。

ブナの新緑の季節に山を散策すると、沢や雪解け水が停滞する様な窪地でこの花の不意打ちに合うことがある。樹木の花の撮影に没頭していた今から約20年前、ウツギ類はタニウツギとツクバネウツギ(タキネツクバネウツギ)で一段落した感があったのだが、西烏川流域に残るブナ林を散策していたところ、薄緑色の花を咲かせたウツギに出会った。明らかにツクバネウツギより大型であった。ガクがツクバネ状でないことからキバナウツギと判定した。その後、中吾妻等の奥羽山脈や阿武隈山地で度々、本種に遭遇した。その時はいつもひょっこり現れるのだが、それは適地が限定されたコロニー的植生であることの裏返しに他ならない。



樹姿



赤紫に縁どられた花冠



花冠

信夫山自然観察会（福島県自然保護協会、信夫山の自然を守る会と共催）

日時：2019年6月30日（日）9：00～15：30

集合場所 信夫山公園駐車場 集合時間 9：00

内容：「信夫山再生計画」の対象エリアの自然的植生、歴史遺産と過去に整備された施設の現在を観察します。福島市のシンボルである信夫山の「歴史文化、自然等の資源」「建造物の有する価値」を活かすためのこれから30年のあるべき姿を考えます。

コース：信夫山公園(9:30)→護国神社裏自然林→御神坂旧参道→花畑→六供部落→曲がり坂下り口→ユズ畑→第2展望台公園(12:20 昼食 13:20)→天狗の森→羽黒神社→花畑→薬師堂→大除染袋置き場→羽山南道→信夫山公園(15:30)*半日のみの参加も受け付けます。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代(500円)

申し込み：6月28日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします。

第165回自然観察会案内：講演会と新地町埒浜防災緑地観察会

日時：2019年9月8日（日）7：30～16：30

集合場所 小鳥の森第一駐車場 集合時間 7：30 参加定員 20名

内容 津波による植物や植生の変化、復旧事業による影響、復旧事業における保護区や湿地再生などの取り組みを観察します。一般公開講座として企画しました福島大学黒沢高秀教授による講演があります。

日程 7:30 小鳥の森駐車場 8:00-9:30 新地町農村環境改善センター 視聴覚室 10:00 講演「津波による浜辺植生の変化と復旧事業における湿地再生への取り組み」(講師 福島大学 黒沢高秀氏) 11:00 昼食・移動 12:30 埒浜防災緑地公園 13:30-14:00 松川浦植生保護地 15:00-16:30 小鳥の森駐車場

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代(500円)、申し込み：9月7日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

西吾妻山域登山道保全対策に関わる東北環境事務所への要望活動報告

西大巔を中心とする山域の登山道保全対策について要望してきました。その結果の概要は以下通りです。

期日：4月25日(木)13:30～15:10 場所：宮城県庁合庁6階 東北地方環境事務所

出席者：(東北環境事務所)小沢晴司東北地方環境事務所長、高橋優人裏磐梯自然保護官、木住野泰明国立公園課長、桑原靖則課長補佐(高山原生林を守る会)佐藤守、小幡仁子、奥田博

要望内容

◆登山道は環境省、周辺の森は森林管理署(森林生態系保護地域)という分担だが、環境省で検討会の立上げ等の調整をお願いできないか？◆磐梯朝日国立公園である朝日連峰と飯豊連峰で行われている保全作業を吾妻連峰でも環境省主導でお願いできないか？◆西大巔の様に急傾斜で崩落している事例は、全国に例を見ないのではないか

説明と回答

◆吾妻連峰の行政管理区分は、裏磐梯自然保護官として24年前に天元台から浄土平間を山形・福島両県の自然保護課を案内した際、分担が決められた。東大巔から東は福島県、西は山形県となった。◆環境省、森林管理署、市町村も含めた県自然保護行政の三位一体での取り組みが必要な時代。今後、何か仕掛け作りを目指したい。◆打合せを招集するなら関係者が多いので、多くの方々意見を聴きながら進めたい。◆八甲田大岳では、急傾斜地に金属ワイヤーで石を止め、崩壊を防いでいるが外観は悪い。◆今後、多方面から情報を取り、取り組み方を判断したい。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第109号 2019年6月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(1000円)を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・小幡